



気負わず力まず自分らしく
春風みたいな人で
ありたいと願う

平野 恵美子さん

EMIKO HIRANO

●日立建設株式会社 柳井支店 工事長 一級土木施工管理技士



まったくの異業種から
建設業界へ

現場監督として、技術者や作業員をたばねなくてはならない立場にある平野さん。柔らかな受け答えやにこやかな笑顔は、そんな厳しい仕事場にいるとはとても思えないほど、温厚そのものです。

「もともと土木建築を目指していたわけでも、関連のある学校を出たわけでもないんです。実は、短大の国文科を出て就職した先では、コンピュータのデータベースから情報検索をするという専門職に就いていました」。情報社会の最先端の知識をあつかうキャリアウーマンで、「研究所の建物にもって、外の天気さえわからない生活でした」と笑います。

しかし、土建業の父親の背中を見て育った平野さんは、離婚を機に自然と建設業界に足を踏み入れることになりました。「いちばん最初の仕事は境界ブロックの目地塗りでした」とたんたと話しますが、まだ0歳の娘さんを抱えていた当時、心の中は複雑だったのではないのでしょうか。

「安全基準が今ほど厳しくなかった20年前、山奥の現場でねんこ半纏に子どもを背負っての作業。真冬の寒さが身にしみました」。無事に夕方帰宅したとき、昔かたぎで口の重いお父さんが「早う、ぬくもれ」とひと声だけ声をかけてくれ、「それだけで十分」と思えたそうです。

皆が「やりきった」と思える
チームワークを目指して

「私は、ドンドンみんなを引っ張っていくようなタイプではないんです」と言う平野さん。だからこそ、作業員さん、警備員さんといったるまで、一人ひとりの立場を尊重し意見を聞いたりしながらの現場になり、女性ならではの包容力がうまく作用するのかもしれない。

この業界に入ったときの平野さんは、本当に知らないことばかりだったそうですが、「いつもまわりに助けられてきた」と話します。特に父亡きあと、現在の日立建設株式会社に



勤めるようになってからは、自分よりひとまわりも若い同僚や、下請けさん達からたくさん教わる事があつたそうです。

下請けの監督から、測量機械の使い方を厳しく指導されるという屈辱の現場も経験したけれど、「あのときに自分で覚えなければ、現場監督としての今はなかったかもしれない」と感謝し、現在も仲良くしてるそうです。

「監督にもっとも必要なものは『決断力』だと思っています。計画通り作業が進まなかったときどうするか、天気が変わったらどう



するかなど、監督が決めなくてはいけない。でも、自分そこがやや弱い」と分析する平野さん。「弱みを克服する努力は当然として、他の人には無い自分なりの良さを出していかないと」

「昔は、先が見えない現場のときなど、朝起きて『行きたくない』と思うことがありました。でも、仲間の監督が『終わらん仕事はない』という言葉で気づかせてくれました。中心である自分が行きたくないのでは、みんなが安心して働けるわけがないんです。つらいことがあっても必ず明日は来るんですよね」

現場をまわすためには、「人のせいとか天候のせいにはせず、責任は自分で持つ」という気構えが必要だ」と話す平野さん。「みんながこの現場に来たことによつて、『やりきった。よかつたな』という気持ちが残るような仕事をした」と考えています。

見えないところで
人々を支えている仕事が誇り

20年前にこの業界に入ったとき、たまたま大型の台風19号が町を襲いました。平野さんはそのとき、

「天災など災害のあった後で、まがらばるのが土建屋だと思つた」と話します。

華やかなキャリアウーマン時代と比べれば、汗や土にまみれて、マンホールを開けては汚水を点検するなど、3Kを地で行く日々。まして現場監督ともなれば、予算の交渉、段取り、施工に関わる膨大な資料作成などが重なつて、年度末などはへとへとになります。「それでも、次の日にまたがんばっている仲間を見ると、土木の世界ってすごいと思う」と平野さん。そこには、「たとえ誰も見なくても地図に残らなくても、やり遂げたと必ずみんなの役に立っている」という自負があるのです。

「同じ現場でも、前日は掘れたのに次の日には歯が立たない、というようなことはザラで、昨日と全く同じというものはありません。それだけに、その日の出会いと出来事に感謝して、自分らしく歩いていきたい。すべてに感謝、です」。トレードマークのおうど色のパジェロに乗込み、さわやかな印象とともに次の仕事場へ向かう平野さんでした。

